

諦めない。踏み出す一歩。

宮城発の車いす



県政運営の基本指針「新・宮城の未来ビジョン」に基づき、各分野で魅力的な活動を展開する県内の企業や団体などを紹介するコーナーです。今回のテーマは「経済・産業」。県が活動をバックアップするテック系スタートアップ®の株式会社 TESS の代表を務める鈴木堅之さんにお話を伺いました。

※新しい技術や発想で、新たなビジネスに挑む企業。



©Naruaki Onishi nippon.com



©Naruaki Onishi nippon.com



国内マラソン大会参加

足こぎ車いす「COGY」の秘密

東北大学発のベンチャー企業である株式会社 TESS が開発した足こぎ車いす「COGY」。その画期的な車いすを製作・販売する会社を設立した契機となったのは、代表を務める鈴木さんが小学校教員時代のこと。車いすを使う生徒が、運動会や遠足に参加しにくい姿を目の当たりにし、「何とかできないか」と模索していたとき、テレビで、足を思うように動かせない高齢者がペダル付きの車いすを自然に足でこぎ姿を見たことがきっかけでした。理学療法士の養成校で学んだ経験を持つ鈴木さんは、当時、東北大学で足こぎ車いすを研究・開発していた半田康延先生を訪ねます。

普及までの地道な取り組み

「COGY」は、科学的な根拠がある一方で、医学界やリハビリの常識からは外れているとされ、専門家の理解を得るまでに時間がかかりました。それでも鈴木さんは「体験すれば、きっと笑顔になつてもらえる」と信じ、諦めることなく、地道な普及活動を続けてきました。国内での認知に苦戦する中、国際協力機構（JICA）の草の根技



株式会社 TESS 代表取締役 鈴木堅之さん。足こぎ車いす「COGY」を通じて、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もがより自由に、笑顔で暮らせる社会の実現を目指しています。「宮城を、限界をつくらない街にしたい」との思いを胸に、日々精力的に取り組んでいます。

と言います。

誰もが自分らしく輝く社会

術協力事業で、ベトナムの枯葉剤被害により身体に障害を持つ方々に「COGY」を提供したところ、その効果がベトナム政府に認められ、中核病院を中心に導入が進みました。現在では、ベトナムのみならず、タイや欧米の国々にも広がりを見せています。国内でも、災害時に避難所へ設置されたことで、高齢者の運動不足や孤立を防ぎ、心身の支えとして活用されました。しかし、地元の宮城県内での認知度向上は、今なお大きな課題

鈴木さんには「行きたい場所へ自分の力で移動することこそが真のリハビリになる」という信念があります。「COGY」に乗ることで、人は笑顔や自信を取り戻し、生き生きとした表情に変わります。中には、足が動かない状態から練習を重ねてホノルルマラソンを「COGY」で完走した人や、電車通勤を始めた人もいます。「COGY」には、

人を前向きにさせる力があります。鈴木さんは「高齢でも障害があっても、やりたいことを諦めなくていい。誰もが自分らしく輝ける社会をつくりたい」と熱く語ります。

自分らしく生きられる地域を宮城から

人が持つ可能性を信じ、諦めない精神を宮城県から伝えたい。そんな温かで、強い信念を持つ鈴木さん。「現在は県外にある競技用車いす製造会社で製造していますが、将来的には宮城で製造できるようにしたい」。鈴木さんはそう展望を語ります。県内には、高度な技術力とものづくりへの情熱を持つ企業が多く、地元企業と連携すれば、利用者一人一人に寄り添った製品づくりが実現できると信じています。

「誰もが自分らしく生きられる地域」と聞いて、真っ先に宮城県を思い浮かべてもらえるようにしたい。そして、そんな社会を、宮城に暮らす皆さんと一緒ににつくってきたい。そのまなざしには、宮城から社会を変える力が宿っていました。

誰もが自分らしく輝ける社会へ



上：COGY に乗り、ホノルルマラソンを完走したユーザー。
下：奄美大島で開催された「COGY ライドツアー」に参加し、笑顔を見せるユーザー。



株式会社 TESS



ホームページ



COGYのユーザー会 (facebook)



“足こぎ車いす COGY のユーザー会”の皆さん。COGY に関する情報交換や、参加者同士の親睦を深めるための交流会などを実施しています。写真からも、参加者の皆さんが共に活動を楽しむ様子が伝わってきます。